

にいがた 地域映像アーカイブ



報告書『光の記憶—南うおぬま地域映像アーカイブ』

南魚沼市・新潟大学ミュージアム連携ネットワーク 2016年3月刊 非売品

ソフトカバー、128ページ



平成26年(2014)に締結された南魚沼市と新潟大学人文学部との連携協定をもとに、南魚沼市、新潟大学人文学部、池田記念美術館の三者によって構成された「南魚沼市・新潟大学ミュージアム連携ネットワーク」を主催者として、魚沼映像アーカイブによる記録と記憶の再生プロジェクト「光の記憶—南うお

ぬま地域映像アーカイブ」を開催しました。

その報告書となる本書では、展覧会・講演会・シンポジウム・歴史文化教育事業からなるプロジェクトの全体像を振り返るとともに、南魚沼市に残る幕末から昭和期までの様々な映像を、新潟の日本舞踊の流派・市山流所蔵の写真とあわせて、一冊の写真集として再構成しました。地域映像の豊かな世界と、地域映像アーカイブの最新の活動を、日英両表記で地域内外に広くご紹介します。

目次	高橋 良一 「光の記憶」
	原田 健一 「故郷の喪失と創造」
	掲載図版
	今成家 幕末～明治初頭、六日町
	梅沢家 明治後期～昭和10年代、大沢
	高橋 捨松 大正期、六日町
	片桐 徳重 昭和期(戦前)、浦佐
	平賀 洗一 昭和期(戦前)、六日町
	六日町の芝居 昭和期(戦前)、六日町
	市山流 昭和期(戦前～戦後)、新潟
	中俣 正義 昭和期(戦後)、六日町

本書についてのお問い合わせ

南魚沼市・新潟大学ミュージアム連携ネットワーク

[事務局] 池田記念美術館

〒949-7302 新潟県南魚沼市浦佐5493-3

八色の森公園 TEL. 025-780-4080

原田健一・石井仁志編

『懐かしさは未来とともにやってくる —地域映像アーカイブの理論と実際—』

新潟大学「地域映像アーカイブ」は、2008年度より活動をはじめ、地域の映像資料の収集や保存、整理、公開、活用についての実践を進めている。その活動をまとめ、さまざまな角度から地域の映像アーカイブについての実践、研究を論じる。今後の映像アーカイブの振興や発展を考えるための1冊。



- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1 地域・映像・アーカイブをつなげるための試論(原田健一) | 8 動画、音声のデジタル化の実際(松本一正・渡辺一史) |
| 第I部 「にいがた」という地域の映像を分析する | 9 デジタル映像の展示の可能性(榎本千賀子) |
| 2 事例としての「にいがた」(原田健一) | 10 共有化される映像展示の場所(石井仁志) |
| 3 小さなメディア? 絵葉書(石井仁志) | 11 美術館において写真のアーカイブは成立するのか?(金子隆一) |
| 4 地域の肖像(石田美紀) | 第IV部 アーカイブでつなげる |
| 第II部 映像をデジタル化し共有化する | 12 写真とアーカイブ(佐藤守弘) |
| 5 地域の映像をどのように整理し使うか(高橋由美子) | 13 地域メディアと映像アーカイブをつなげる(北村順生) |
| 6 映像のインデキシングの実際(中村隆志・佐々木岳人) | 14 アーカイブとアーカイブをつなげる(水島久光) |
| 7 デジタル映像アーカイブをめぐる知的財産としての権利(古賀豊) | |
| 第III部 映像をデジタル化し創造する | |

学文社 2013年9月刊 定価3,675円

『北越雪譜』から民俗写真へ

石井正己（東京学芸大学）

今回、池田記念美術館で開催された展覧会「光の記憶」を前にして、「くらしの記憶と記録」というテーマを考えようとするとき、2011年3月の東日本大震災を忘れることができない。今年（2015）年9月にも、関東・東北豪雨によって利根川が決壊し、常総市などが大きな被害を受けている。NHKの巨大災害の放送によれば、こうした変異はもはや異常ではなく、地球環境が大きく変わってきていると見るべきである。

寺田寅彦の指摘したように、文明が発達すると、災害によって日々のくらしが失われた場合、復旧・復興が困難になる。しかし、その渦中にありながら、流失した写真が亡くなった家族を取り戻すための思い出のよすがになっていることからすれば、映像の持つ意味合いは大きい。やがて起こるであろう巨大災害と向き合うには、記録を記憶に変えてゆく仕掛けを作り、心の防波堤を高くして常に補修することが大切になると考えている。

そこで、これまで関わってきた民俗学の立場から、新潟県を対象にして、この問題について考えてみたい。幸い、この地域には江戸時代に『北越雪譜』があり、昭和時代には柳田国男監修の『日本民俗図録』（朝日新聞社、1955年）や濱谷浩の『雪国』（毎日新聞社1956年）、名取洋之助編の『新潟県』（岩波書店、1958年）がある。それらを通史的に読み解くことによって、「くらしの記憶と記録」について考えるところを述べてゆく。

1. 鈴木牧之『北越雪譜』の挿絵

江戸時代の後期に北東北・南北海道を歩いて紀行や地誌を書いた人物に、菅江真澄（1754～1829）がいる。真澄は文章の間を縫うようにして、細やかな色彩画を数多く描いている。しかし、それが災いしたのか、長く出版されることはなかった。昭和時代の初期に

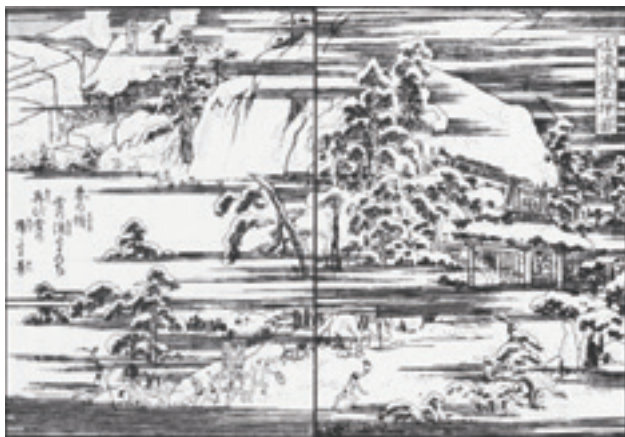
なって、柳田国男（1875～1962）が原本を複製し、深沢多市（1874～1934）が秋田叢書別集に収録して、ようやく出版が叶ったのである。

それに対して、鈴木牧之（1770～1842）の場合、山東京伝の弟・山東京山（1769～1858）の刪定を経て、『北越雪譜』（1837～1842）を出版することができた。名所図会が次々と出版された時期であり、越後の縮商人であった牧之は江戸の文人との交流を持っていたことが大きい。京山が息子の京水（1816

～1867）に挿絵を描き直させたところもあり、数え方にもよるが、この作品には52点ほどの挿絵が載っている。

その中には現在も続く行事や生業が見られる。例えば、普光寺毘沙門堂の裸押合大祭は「○浦佐の堂押」に「浦佐詣堂押図」とともに載っている（図版1）。伝統工芸の縮は「○縮を曬す」に「雪中晒縮図」とともに載っている（次頁、

図版3）。縮は雪を利用した生業で、2009年に小千谷縮・越後上布はユネスコの無形文化遺産に登録された。時代に合わせた変質を伴いながらも、ここには170年前の魚沼の生活が残されており、歴史的な価値は高い。



1. 「浦佐詣堂押図」『北越雪譜』



2. 中俣正義写「浦佐毘沙門堂裸押合」1960年代 NM-P-009-027-30

▶ 例えば、「○雪を掃ふ」は、和漢の吟詠では雪を掃うのは風雅だが、大雪を掃うのは風雅ではないとする。1度降れば1度掃うのを俚言に「雪掘」と言う。雪を掘るには木で作った鋤を用い、俚言に「こすき」(木鋤)と呼ぶ。「かかる大雪」の「かかる」は挿絵の「掃除積雪之図」を指す。そこにはこすきを使って雪を掃う様子が描かれている。山中の人はこれを作って、里に売ったという。「雪中歩行用具」にも「こすき」が見える。

さらに「○雪を掃ふ」では、「雪を掘る状態は図にあらはしたるが如し」とし、掘った雪は空地の、人の邪魔にならない場所に積み上げ、俚言に「掘揚」と言う。この「図」とは「駅中積雪之図」を指す。図中には1～3の番号があり、1は「人家の雪を掘る事本文にいへるごとし」、2は「雪をほりて洞のごとくになし棚も台もみな雪にて作り物を売るこれをさつやといふ」、3は「図中山の如くなる所みな雪なり」である。雪を降ろし雪を揚げる人がもっと多かったことは、本文にある「掘る処図には人数を略してゑがけり」という注記からわかる。

こうして「○雪を掃ふ」を見るだけでも、『北越雪譜』は豪雪地帯魚沼の暮らしを如実に記した記録になっている。この他にも、「○雪中の洪水」は「雪中洪水之図」とともに、初雪後の洪水を書き残す。「○吹雪」は「農人夫婦逢雪吹図」とともに、夫婦が急な吹雪で亡くなり、乳呑み児だけが生き残った話を記す。豪雪地帯の悲劇であり、この地域がしばしば雪による災害に遭ってきたことを記録している。

2. 柳田国男監修の図説・図録に見る挿絵と写真

あまり知られていないことだが、柳田国男は自分の著書に写真や挿絵を熱心に入れて、重要な役割を担わせていた。1910年の『石神問答』には市販の絵葉書を使い、1925年の

『海南小記』には多くの写真を入れ、1928年の『雪国の春』には真澄遊覧記の挿絵を模写して載せた。そうした資料は改版時に削除された場合があり、生前から刊行が始まった『定本柳田国男集』が「先生のお書きになったもの」に限定したために、そうした傾向が決定的になった。その結果、柳田は写真や挿絵を軽視したように見られてしまった。

だが、戦後、民俗学の共同研究を推進する機関として財団法人民俗学研究所を設置し、その成果を次々に刊行した際には違っていた。その中に、1953年の柳田国男監修・民俗学研究所編『年中行事図説』(岩崎書店)と、1955年の柳田国男監修・民俗学研究所編『日本民俗図録』(朝日新聞社)がある。前者は口絵に写真、本文に多くの挿絵を載せて「図説」とし、後者はおびただしい量の写真を載せて「図録」とした。前者には8点の挿絵、後者には12点の写真が、新潟県から収録されている。

『日本民俗図録』の298・299は「毛ボカイ(1)―(2)」。

秋田県のマタギと呼ばれた狩人が熊や羚羊を捕ったときに行う作法で、獲物の皮を剥いで、それを頭部を下にして逆さに被せる。「ホカヒは神霊に供物をあげることで、他地方で毛祭というのと同じことである」とする。300の「毛ボカイ(3)」が新潟県の事例で、「この地方の狩人は、毛ボカヒという言葉は使わないが、熊を捕った時、やはり秋田マタギと同じ作法で獣の皮を剥いで逆さにしてかける」と説明し、写真を載せる(次頁、図版5)。

実は、この写真は別のかたちですでに利用されていた。1948年の『村のすがた』は、1944年から45年にかけて『週刊朝日』に連載され、戦後になって単行本化された。雑誌連載は熊谷元一(1909～2010)や東山魁夷(1908～1999)らの画家を使って乗り切ったが、単行本では野口義恵1人に絞った。『定本柳田国男集』(1962～1971)はそれらの挿絵をほ



3. 「雪中晒縮図」『北越雪譜』



4. 中俣正義写「越後上布の雪晒し」1957年3月 塩沢町十日市 NM-P-006-047-05



5. 『日本民俗図録』 75 頁



6. 『村のすがた』（『柳田國男全集』第 17 巻、筑摩書房、1999 年、457 頁）



7. 中俣正義写「熊の皮」1956 年 5 月 湯の谷村 NM-P-004-002-04

とんど削除してしまったが、この本は本文と挿絵が一体化することによって、まさに「村のすがた」を描き出していた。「毛ばかい・毛祭」には、この写真を挿絵に描き直し、「越後北蒲原郡（ママ）山村の毛祭」として入れ、本文の「この絵に見るように」と対応させた（図版 6）。

一方、柳田は『日本民俗図録』の「序」で、民俗学に写真を利用する気持ちが起こらなかったのは、写真技術の普及の遅れや写真利用に対する無関心があったにせよ、「不覚の至

り」であったとする。そして、「写真というのは、事象の周囲の状況なり雰囲気なりが入るので、大きな価値を持ってくる」と評価し、「シチュエーションを好く表わすようなスナップで、あるまの姿が撮れるように努力する」ことが大切だと説いた。民俗学に早くから映像を取り入れたのは渋沢敬三（1896～1963）だったが、渋沢のもとで学んだ宮本常一（1907～1981）の写真に、柳田がここで述べた思想が具現化しているように思われる。

▶ 3. 濱谷浩『雪国』が撮った新潟県と民俗学

民俗学の影響を強く受けて新潟県を撮った写真家に、濱谷浩（1915～1999）がいる。1956年の『雪国 カメラ朝日別冊』（毎日新聞社）はその白眉である。扉に「これは日本人の生活の古典を記録した本である」としたのは、民俗学の影響である。構成は大きく「越後」と「桑取谷」に分かれ、前者は1955年から56年撮影の18点で、1957年の『裏日本』（新潮社）に連続し、後者は1940年から42年撮影の108点である。後者は上越市桑取谷の小正月行事を撮ったもので、「あとがき」で、「方法は狭い地域の短い期間の行事を、できるだけ精密に撮影する計画をたてた。それで実行に移し、ある程度目的を達した」と述べている。

例えば、十日町の「6 ホンヤラ洞で歌う子供たち」は、『北越雪譜』の「○鳥追櫓」に載った「正月鳥追櫓之図」を意識しているのではない（図版8、9）。鳥追櫓はもう作られなくなったようだが、子供たちの歌う鳥追歌はよく似ている。100年の時を超えて、この行事が続いていることを見ていたにち

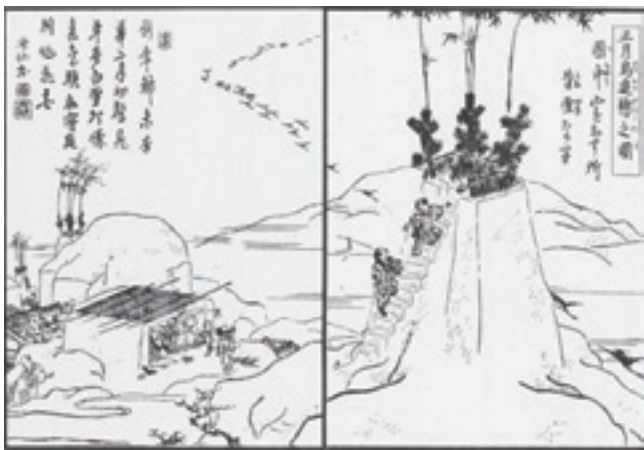
がない。ただし、「町や村の辻々に、子供の世界の、子供の天国が開かれる。雪国の子供だけのお伽の国の行事である」とする記述は、民俗学を超えるような詩人の感覚であろう。

また、高田市の「8 危い雪路」は、豪雪によって山が築かれ、峠ができ、谷が走るとする。これは、やはり『北越雪譜』の「○雪を掃ふ」を連想させる。だが、「凍てついた朝はことに危く、さすがに雪国に育った者でも大困惑。接骨病院は大繁昌となる。滑る雪道はチョコチョコと小股に、足を雪から離さずに歩く。見てみると、貧相な歩きぶりだが、それが転ばぬ先のコツなのである」と述べるところは、都会人にはわからない、雪国のくらしの身体感覚に迫る。それは雪山の上から老婆を撮る視線と重なっている。

この写真集には洪沢敬三が「序」を寄せている。「濱谷さんの民俗学的視野は広まり、同時にわが国常民の生活様式を単に撮影記録するに止まらず、民俗に潜む悠久な歴史を通じての個人個人、及び集団に受け継がれた「日本常民の心」を汲みとってこれを写真に表現せんとする意念が強く抱かれ初めたようです」とする。洪沢は民具のような物からくらしを捉えようとしたが、ここでは「心」を持ち出す。「濱谷さんの撮った風景や民俗事象は「写真」とであると同時に「写心」でもあると思います」とも述べている。

一方、魚沼にこだわった写真ということならば、むしろ、1962年の島田謹介（1900～1994）『雪国』（暮らしの手帖社）を引き合いに出すべきかもしれない。「あとがき」にはスキーブームの到来で雪国の生活が安定し、素朴だった服装も大きく変化したことを指摘している。それはそれで重要だが、せっかく魚沼を撮りながらも、『北越雪譜』はもちろん、民俗学への関心は見られない。「長いトンネルを抜けるとそこはもう深い雪で埋った別天地であった」という一文からすれば、意識

したのは川端康成の『雪国』にちがいない。そうした意味で、この写真集は民俗写真の系譜に位置づけることはできない。



8. 「正月鳥追櫓之図」『北越雪譜』



9. 「6 ホンヤラ洞で歌う子供たち」
『雪国 カメラ朝日別冊』



10. 中俣正義写
「小正月 子どもたちは
雪塔に登り鳥追い唄をうたう」
1953年1月14日 六日町
NM-P-002-002-01



山間の村では来作も行われているが、山深いところになると人口密度4人とか5人とかいう村が結構ある。僅かばかりの田舎を開いて畑を作っている。大抵、トウモロコシ、アブ、イモ、ソバナとか重要な作物である。冬は深い雪に閉ざされるため、冬ごもりの内職や、みかんもぎ、漬作り、製大工などの仕事が多い。北部の大田舎や朝日岳の麓には「またき」といって熊手や薪割とする人、やまのい



国内工業的な植物の産地でも新しい設備による大量生産が行われている。工業的のメリヤスは、伝統のある二重を冠して年間約4億件を生産している。十日町市は、苧苧、絹織、絹糸などの高級品に新しい技術と手をいれ、年間300億円を大都市へ出荷し、足付市絹産地では化繊産地に先鞭をつけた。古くから加賀絨の産地として名高い加賀でもタイロンへの転換がみられる。高田市の絹織ものは全生産量の50%を占め、総額テープ、バンド、縫製、リボンなどでは国内だけでなく海外へ輸出している。



証されいるのは古い歴史を持つているが、小舟船は寛文年間(1661)に越後上杉に改良を加えて売り出されたもの。長崎・越後船子にも上りこまれて、江戸中期には全国に広がった。この船型には、船雪の上にあるすて雪と特に関係が深く、天保年間(1830)に始まる「雪の北船雪」には「雪の中で舟をつくり、雪の中で漕ぎ、雪の水に洗い、雪の上に乗る」と書かれている。小舟船は今も古風な「いざり船」で漕られる家内下流で、餅つきや芋煮会にも昔のままに使えられ、その性格は無形文化財に指定されている。



—小舟船の漕

[illegible]



11.「雪上掘図」『北越雪譜』



12.『新潟県一新風土記』4頁

▶ 4. 名取洋之助の岩波写真文庫が残した新潟県の組写真

それに比べれば、戦後の復興を経て、高度経済成長期にさしかかった新潟県を鮮やかに切り取ったのは、1958年の名取洋之助（1910～1962）編『新潟県一新風土記―岩波写真文庫256』（岩波書店）ではないか。岩波写真文庫にはテーマで編集したものの他に、こうした風土記があり、こちらの方がよく売れたという。目次の上のまえがきには、新潟県は豊かな土地であり、農業と工業が発展し、「同じ雪国でありながら、東北にみられる暗さが感じられないのも、この豊かさを反映している」と述べる。そこにある雪降ろしの写真は、『北越雪譜』の「雪上掘図」と変わるところがない（図版11、12）。

写真は何人かから提供されたものであるが、それを編集する際に、名取は得意とした組写真の技法を駆使した。例えば、「山村」は、右頁に「中魚沼郡中里町藤沢の部落」「この付近の農家の造りはL字形」「軒下にはさまざまなものが乾してある」の3点を並べる（前頁、図版13）。左頁には乾してあるさまざまなものとして、「ヤマゴボウの葉」「ヒロロ。ミノの材料」「脚絆」「玉蜀黍とチマキにする笹の葉」「ガマ。脚絆の材料」「養蚕に使うマブシ」「カヤ。これで屋根を葺く」「種夕顔」「ヒロロでつくったミノ」の9点を入れる。「新仏の墓」「セナコウジ」の2点は葬送や運搬の民俗である。組写真について

は、説明的分析的であるとする批判があるが、見開き2頁で山村生活の衣食住が見事に構成されていることに気がつく。

また、「越後の織物」では、『北越雪譜』を引いて解説している。右頁の「越後上布の雪さらし 湯沢町」は、『北越雪譜』の「雪中晒縮図」と変わるところがない（前頁、図版14）。「小千谷市の緋」も伝統が生きている場面を写す。だが、左頁になると一転して、新しい設備による大量生産が始まっている

として、「五泉市の絹織物」「五泉市はメリヤスの生産が多い」「近代的な製糸工場。小千谷市」「高田市のテープ工場」「お召のデザイン。十日町市」の5点が入る。伝統的な工芸と近代的な産業が共存している様子が明快に示されている。

島田謹介が取り上げたスキーについても、「高田市」で、オーストリアの武官レルヒが日本で初めてスキーを試みた所だとし、「妙高高原」では「冬の妙高温泉はスキー客で賑う」とする。「十日町市の雪祭り」「雪の芸術」コンクール」も載るが、これは1950年に始まった祭りで、現在も続く。雪国のレジャーやイベントについてもぬかりなく載せて、伝統的なくらしが大きく変わろうとしていた様子を明らかにしている。

思うに、『北越雪譜』の挿絵から170年、こうした写真からでもすでに50年以上が経ったことになる。それぞれの記録が定点観測の記録として意味を持つ。だが、その意味を現代の視線から読み解くことがなければ、懐かしい新潟県がここにある程度で終わってしまう。与えられたテーマ「くらしの記憶と記録」に照らせば、絶えず記録を記憶にしてゆく作業が必要になる。今、日本各地で地域を写した写真の価値が再発見されつつある。しかし、膨大に溢れる映像のビッグデータを前にして、立ちすくむ状況を迎えていることも間違いない。私たちの映像リテラシーの変革が求められている。こうした企画が各地で展開され、新潟県から地域と映像を結ぶ実践と理論が発信されることを願ってやまない。 ■

参考文献

鈴木牧之編撰・京山人百樹刪定・岡田武松校訂『北越雪譜』岩波書店、1936年、1978年改版。
名取洋之助『写真の読みかた』岩波書店、1963年。
竹内利美ほか編『日本庶民生活史料集成 第9巻 風俗』三一書房、1969年。
中西昭雄『名取洋之助の時代』朝日新聞社、1981年。
足立区立郷土博物館編『雪山川 豪雪地帯の民俗』足立区立郷土博物館、1997年。
十日町市博物館ほか編『北越雪譜と魚沼の風土』十日町市博物館友の会、2002年。
毎日新聞社編『宮本常一写真・日記集成 上巻・下巻・別巻』毎日新聞社、2005年。
多田亜生ほか編『生誕100年 写真家・濱谷浩』クレヴィス、2015年。

付記

2015年9月12日、池田記念美術館「くらしの記憶と記録」の講演をもとにまとめた。
ただし、周防大島文化交流センター提供の宮本常一が撮った魚沼の写真については、紙幅の関係で割愛した。

湊町・新潟の原風景 —芸妓から見た「にいがた」—

原田健一（新潟大学）



1. 「新潟美人おけさ踊」(絵葉書)

1. 芸の道

現在の新潟市の島内は、江戸中期から明治中期にかけて北前船が代表する北海道と大阪を結びつける日本海の交通の発達があっただけでなく、それに連動するように、網目のように広がった信濃川と阿賀野川の内陸の水系が密接に関わって発展した。これらの水路は、陸路である長野、関東、会津を結びつけ、交通の要・中継地として繁栄した。こうした交通網の発達には、当然のことながら、物と人との流通を活発化させ、川沿いの停泊地に、そして、海と川が接合する港に、さまざまな宿泊や食事をする処を生み出し、遂には、花街を形成させた。

ところで、信州の中山道と北国街道の分岐点である追分宿で唄われていた馬子唄が追分節となり、北国街道を北上し、越後に入り新潟港で松前節となり、北前船の船乗りたちが港々に伝え江差追分になったとされる。

この歌のロードは、そうした道と川、そして海とが結ばれた結節点で生み出されたものだが、その結ばれをになったものは、物を運び、情報を伝える荷役の人びと、贅女などの芸人たちであり、それを迎える宿場の人びと、飯盛女たちだった（竹内、2003）。

ところで、この飯盛女とは、食事の給仕や寝床の用意をするものであり、時に客を楽しませる芸を披露し、また、身を売るものでもあった。料理を出し泊まるのが宿泊所で、芸を見せるのが芸妓で、身を売るのが娼妓だとすれば分かりやすいが、近代以前において、旅をする物流と経済、そして文化はあいまいに結びつくことで成り立つ。日本における近代化とは、こうしたあいまいさを分化していくことでもあった。

江戸時代、新潟湊において遊郭が形成されていたが近代化のなかで、1872（明治5）年「泊茶屋抱女並に養女等にして事実娼婦又は芸妓を渡世とする者を一般に飯盛女と称へしめたることあり。その後遊女屋は貸座敷と称し、遊女は娼妓・芸

▶ 妓と両別するに至りしが、普通には娼妓を子供衆、芸妓を芸者又は町芸者・女芸者と云ひ、外に色芸兼売のものを歌舞遊女等呼び區別」(新潟市役所、1973,655)していたが、1881(明治14)年7月に新潟県会にて歌舞遊女の廃止が決められる。また、1879(明治12)年6月「芸妓は貸座敷にあらざる家屋に居住すべきを命じ娼婦と隔離す」(新潟市役所、1973,664)ることになり、芸妓置屋が始まり、これが制度化していく過程で三業としての料理屋、待合、置屋が発展する。

ここで三業について簡単に説明しておくと、置屋とは芸娼妓を置き(後に芸妓置屋と娼妓置屋に分かれる)、自分の家で客を遊興させるのではなく、料理屋や待合からの依頼を受けて派遣する処であり、待合はこうした芸妓などと呼んで人を接待し、料理を直接提供することはないが、泊まることができる場所であった。それに対して料理屋は、寝泊まりすることができないが、芸妓の接待とつづいた料理で饗応する。

ところで、『東北時報』1929(昭和4)年11月3日付の記事によれば、芸妓の数は、14歳から55歳まで391人。20人以上

の高原状態は16歳から24歳までで、245人で63%を占める。残りの37%が25歳以上で、しかも途切れることはない。一方で、娼妓の数は19歳から37歳までで390人。20人以上の高原状態は19歳から26歳までで、344人で88%を占める。27歳

13人、28歳14人、29歳8人、30歳4人、31歳1人、33歳2人、34歳1人、35歳1人、37歳1人となる。30才以上は10人と少ない。同じ接客業であっても芸を売ることにはそれなりの熟練度が求められ、また客もそれを求めたといえる。さらに女給の数をみると15歳から29歳までで288人、20人以上の高原状態は17歳から24歳までで、250人で87%を占める。25歳8人、26歳4人、27・28・29歳各1人である。娼妓と同じような年齢構成ではあるが、女給の方が、さらに若さが売りとなっていたことは明らかであり、しだいに性的な商品として消耗品扱いにされていったことがみえる。なお、芸妓、娼妓、女給の総数は1,069人である。

また、芸妓の組合別にみると、1934(昭和9)年では、新潟上組芸妓組合(古町、西堀前通、東堀通八、九番町 西堀通八番町)約300人、新潟下組芸妓組合(新潟遊郭内)約30人、沼垂料芸組約60人 総計約400人の芸妓がいた。



2. 「人か花か」(絵葉書)

2. 芸妓の表舞台―観光

ところで、2011年4月新潟市歴史博物館で『“新潟美人”展』がおこなわれた。その内容は芸妓に中心にした展示で、「新潟美人の美人観をつくりだしたのは、新潟町の名妓・美妓たちです。そのため新潟美人という呼称も、新潟町の芸妓に向けられたものでした」(小林、2011,10)としている。「富士山、芸者」は外国向けに使われる日本イメージの常套句であるが、同じ事が日本国内において再生産されたオリエンタリズムの一種ともいえる。展示されたおびただしい錦絵、写真、絵葉書といったものの背景には、それらの映像を見て買う消費者がいる。それは、メディア化された人びとの一般化された欲望であり、それを体現する大衆の存在を表す。当然のことながら、こうした大衆の欲望に見合っささまざまなパターン化された表現のコードが創られる。それは良くも悪くも芸妓を売る側の視線をもとにし、商品化したものであり、あくまで写す側が表



3. (左)「西堀と柳と芸者」1950～1951年 NM-P-044-057-01 中俣正義写

現のイニシアティブを握って創られたものとなる。

1900(明治33)年私製葉書が認められて以降に作られた、絵葉書化された芸妓たちの映像を見てみると、ここで形づくられた通俗化したイメージ、芸妓(芸者)が代表する美人イメージは、そのまま、現在のCMにおける美人像や、アイドルまで通底する水脈となっているといってもよい。

また、そうした美人への憧れは、実際にそれを見たいという願望へと転化し、人びとを呼び寄せるものになる。交通の結節点に現れた芸妓が、観光の目玉へと転換していくのは客商売の必然ともいえる。1688(貞享5)年、「京都で出版された『諸国色里案内』に「にいがた、なるほどゆたかなるミなどにて、小うた・しやミせんあり。しゅらひ(集札)百文、三百文までなり」とすでに紹介され、「江戸時代後期から幕末には、新潟を訪れる男の多くは芸者や遊女を楽しみにしてい」(伊東、2011,6)たとする。こうした構造は、現在においても、再生産されており、今なお、新潟の観光の目玉として芸者は登場する。

3. 芸妓の舞台裏-料亭

芸妓にとって美人や観光が表舞台の顔なら、実際の芸妓たちの仕事場は料亭であり、そこでの接客となる。料亭での芸妓がどんなおもてなしをしているのか、中俣正義が1958年5月27日、料亭金辰での酒宴の様子を組み写真にまとめているので、それを見てみよう。ここでは、芸妓の接客のプロとして ▶



4. (右)「芸者」1950～1951年 NM-P-044-034-01 中俣正義写



5. NM-P-041-088-02



6. NM-P-041-088-20



7. NM-P-041-089-25



8. NM-P-041-089-89



9. NM-P-041-089-28

► の姿が写し出されている。当然のことながら、6畳ほどの小さな部屋が芸妓たちの仕事場である。そこでは常日頃の生活空間とは異なった世界があり、お客は俗世間とは違ったルールで動く。無礼講というのは、こうしたことを意味する。

ところで、芸妓たちの主戦場は料亭という舞台が設定されるが、そこには、小さな舞台裏が存在する。通常、客にそれが明かされることはない。そうした現実を映像化したのは、行成亭の四代目松次良による16mmの動画である。新潟市中央区西大畑町にある鍋茶屋と

並ぶ新潟を代表する老舗料亭の行形亭は、1750年頃、海岸ばたであった現在の場所に、料理屋を始め、最初は浦島屋の屋号であったが、三代目から行形亭となり松次良と名のり、現在は六代目である。ここで写されるのは、行形亭の帳場であり、そこで一服する芸妓たち

の何気ない姿がある。松次良の視線は明らかに業態は違っても同業者への、それとなく気配りをしている温かな目である。そこには仲間意識があるといつてよい。

4. 表現者としての芸妓と子女 ―踊りを修練する市山流―

江戸時代、日本舞踊は歌舞伎舞踊を中心に発達し、その歌舞伎における舞踊的要素の拡大にともなって、18世紀初頭には振付師が必要とされるようになったとされる。俳優から振付師への転向者は、志賀山万作が最初とされ、その後、西川仙蔵、藤間勘兵衛、市山七十郎らが出るにことなり、さらに劇場以外の人びとも教えるようになり、舞踏の各流派、家元が生まれることになった(戸部、1986,129)。

ところで、市山流は、江戸時代中期、大阪の俳優市山助五郎の弟子であった市山七十郎が舞踏に長じていたため振付師に転向したものだが、初代の長男は狂言作者の初代瀬川如皐で、弟は若女形の三代目瀬川菊之丞であった。その後、二代目は菊之丞門弟の市山兼次郎が継ぎ、三代目は踊りに秀でた岩井仲助になった。三代目は新潟湊が天領となった1843年頃に、新潟に拠点を移すことになる。新潟の花柳界が発達していたこと、さらには江戸、大阪・京都にも文化的につながっていたことがあったと推測される。どちらにしても、日本舞踊の家元は東京、京都、大阪、名古屋の4都市を拠点にして

おり、それ以外の地域では新潟の市山流だけである。市山流は2003年に新潟市の無形文化財第1号に指定されている。現在も、市山流は歌舞伎の振付も行っているが、家元として芸妓だけではなく、多くの子女にその踊りを教えている。

市山宅に残された多くの写真は、年代は1930年代以降のもので、写されている人びとは、踊りの修練をした芸妓や子女たちの舞踊会などのハレの場所の記念写真であり、撮影は主に和田写真館が行っているものである。これらの写真



10. (左) 帳場 11. (右) くつろぐ芸妓「あれこれ」1930年代 IY-M-035

で興味深いのは、写す側(和田写真館)が何かを表現しようとしているのではなく、写される芸者や子女たちが自らの得意とする演目のここぞという場面を自ら選んで、写させている点にある。表現しているのは被写体の方であり、映像の主体も芸妓や子女たちにある。写される対象であった人びとが、自らを表現する側へとイニシアチブを舵きりしているのである。ここには、踊りに対する長い修練の時間が込められている。芸妓が芸を見せるものであり、誇らしさもそこにある。ここでは、幾層にも創られたイメージでしかなかった芸妓が、自らこうありたいという主張を再び、映像の側へ、さらにはメディアの側へと返している。彼女たちの写真が「POST CARD」の紙に焼かれているのは、多くの顧客に対して贈るものであったことを示している。それは小さなメディアであるが、親密で自分たちの誇りと思いを伝えるものである。芸妓が、再び、現実の日常生活へと向かおうとしている姿を示している。■

【引用文献】

伊東裕之、2011『“新潟美人”展図録』新潟市歴史博物館
小林隆幸、2011『“新潟美人”展図録』新潟市歴史博物館
新潟市役所、1973『新潟市史』下巻 名著出版
竹内勉、2003『追分と宿場・港の女』本阿弥書店
戸部銀作、1986『振付師の存在』『舞踊名作事典』演劇出版社



12. ID-P-006-461 五代目市川七十世



13. ID-P-006-573 「木賊刈 (とくさがり)」 梅沢稲千代



14. ID-P-006-050 「かさね」



15. ID-P-006-537 「五大力」

勝之助兄にゃと写真

船城俊太郎



(上) TK-P-005-046-06 1960年代

(下) TK-P-006-038-26 1960年代

角田勝之助^{あん}さんのことを、金山町玉梨の人たちは通常「勝^{あん}之助兄^{あん}にゃ」「勝兄^{あん}にゃ」と呼ぶが、その勝兄^{あん}にゃは私にとって始めはラジオの人であって、カメラの人ではなかった。

戦後しばらく、玉梨では新しいラジオを手に入れることが難しく、戦前からのそれに修理・手入れをしながらラジオ放送を聞いていた。私の家には、そのような修理などを出来る人はおらず、勝兄^{あん}にゃに頼んでいた。そして、戦前からの機械がいよいよ駄目になると、勝兄^{あん}にゃは、ラジオのキットの販売をどこからか見付けて、それを組み立てて私の家に持ってきてくれた。そのようなラジオは、前後三台ぐらいあったように記憶する。

勝兄^{あん}にゃの家とは、もともと親類だったので、ラジオの修理などの後で私の家に泊まってゆくこともあった。そして、私が小学二年生になる春休み（昭和二十七年）に、勝兄^{あん}にゃは、私の両親の仲人で、隣の坪（＝集落のこと）のコマノ姉と祝言をあげた。それにより私の家と勝兄^{あん}にゃの家は、益々親密になったと思われる。

そんな間柄の親類であるにもかかわらず、私は、勝兄^{あん}にゃがこんなに深い写真の趣味を持っていることを、かなり最近まで知らなかった。私の家の葬式や法事の集合写真を撮って貰ったことは何度もあるが、単なる素人の写真以上のものではないと思っていた。しかし、十数年前に勝兄^{あん}にゃの写真歴が戦後すぐにまで遡り、撮ったその枚数が膨大であることを、たまたま知って驚いた。

その頃、私は、過疎が進行する故郷の村々の文化財や歴史資料が、今後どのようにになってしまうのか心配になり、それらをどうすればよいのか、少し考え始めていたが、特に写真の類は散逸しやすいと思われ、早急に手を打つ必要があると思うようになった。そんなところに、当時私が勤めていた新潟大学人文学部に、アーカイブ（保存記録）が専門の原田健一さんが赴任された。そこで、勝兄^{あん}にゃの写真のことを相談してみたところ、早速に金山町玉梨まで来てくださり、事が始まったのである。

当初、勝兄^{あん}にゃの写真中に見いだせると私が考えたのは、過去に福島県立博物館などがそれを利用した例からして、民俗学関係のものかということであった。ところが、驚いたことは、原田さんがそればかりではなく、芸術的なものもそこに見いだしたと思われることである。そして、それにより勝兄^{あん}にゃ

の写真が「村の肖像・展」として世に紹介され始めたのであるが、そのことは、私にとって晴天の霹靂に近く、勝兄^{あん}にゃという人をもう一度見直してみなければ、という気持ちにさせた。

その一方で、私はそこで展示される写真の中に、私の両親のそれが、なかなか見出されないことに気がついた。勝兄^{あん}にゃの仲人親であり、親しくしていたはずの両親の写真が見つからないのは、不思議なことに思われた。

しかし、また考えるに、私の両親は、そのような間柄からして、勝兄^{あん}にゃにとって少し煙たい存在だったのではないだろうか。戦後すぐの時代では、多分玉梨でたった一人の写真機の所有者であり、それを趣味としていることも、微妙に影響しているかとも思われる。

そして、そのような目で見ると、被写体となった人達には、村

の長老や玉梨小学校の先生方などのような気の遣える人は少なく、勝兄^{あん}にゃと同年ぐらいか、それ以下の年齢の人が多くのように思われる。玉梨・八町のそのような人達中心に、自由自在に撮影して来たのが、勝兄^{あん}にゃの写真と言えるのではないだろうか。

そのような作品には、一見スナップ写真のように見えるが、実は軽くポーズを取っているものも多いように思われ、被写体自体も写真造りに参加して、その満足感を共有しているように見えるものも多い。その

辺りが芸術性が感じられる理由ではないであろうか。

勝兄^{あん}にゃの写真には、よくある、民俗学や歴史学的な価値を意識したような作品が少ないことも、その特長の一つかと思われる。それがよいことかどうかは、議論の余地があるかも知れない。しかし、そのことは、あくまで人間の姿そのものに興味があるということかと思われ、写真が固い印象を与えるものになることも防いでいるように思われる。

勝兄^{あん}にゃは、昭和三十年代以降、地元の建設会社の現場写真の係となり、定年を迎えた。

したがって、玉梨以外に住んだことはないと思われる。一人息子という立場で成長し、戦前、戦中、戦後を生きてきた勝兄^{あん}にゃが、オーディオ関係やカメラのほか、カラオケも大好きであることはよく知られている。大工仕事の趣味も持ち、勿論お酒も大好きで、その周囲はいつも賑やかである。都会風でもなく、田舎風とも言えず、趣味とともに戦後の山村に人生を送ってきた、稀なる人だと思われる。 ■



角田勝之助の父弥一 TK-P-001-004-04 1950年代

アーカイブを活用した映像研究と教育の可能性

伊藤 守 (早稲田大学)

1. 日本における映像アーカイブの現状

今回はじめて池田記念美術館に参りまして、館内の展示を見学しました。明治初期の六日町で撮影された今成家の写真や、戦前から戦後にかけての魚沼地域の風景や人々の生活を記録した映像や写真を拝見して、大変心を動かされました。また、この美術館も、八海山を臨むすばらしい空間に位置して、とてもよい美術館です。

こうした空間にはちょっと相応しくない、無粋な話になるかもしれませんが、私からは「アーカイブを活用した映像研究と教育の可能性」というタイトルでお話いたします。

さて、池田美術館は新潟大学地域映像アーカイブセンターと共同で、今回のような企画を立てて、イベントや講演会を行っておられるわけですが、アーカイブとは元々、公文書や古文書を保管すること、保管する所、を意味しています。東京には国立の公文書館がありますが、これはまさに日本のアーカイブのセンターといえます。古文書、議会の議事録や会議録などの公文書、あるいは公人の手記などを、文化的に重要な価値をもつものとして収集、保管、公開してきたということです。また、納本制度によって、国立国会図書館は日本で刊行されたすべての雑誌や書籍を収集・保管・公開しています。図書館も文字や印刷・出版物を収集・保管・公開するアーカイブ機関です。

映像アーカイブ設立の機運

ところで、映像に関しては、この15年ほどの間ででしょうか、ようやくその文化的な価値が認識され、写真や映画そしてテレビ番組といった映像を収集し、保管しようという動きが出てきました。映像アーカイブの重要性がようやく認識されはじめたということでしょう。東京国立近代美術館のフィルムセンターは主に映画の収集と保管を担っていますが、印刷物と比較して、なぜ映像の収集・保管が遅れたのか。いくつか理由があると思います。第一は、映像がもつ資料的な、そして歴

史的な価値にかんする認識がなかなか高まらなかったことが大きいと感じます。有名な写真家の作品などは写真集として出版され、あるいは商業的に成功した映画などはかなりの程度保管されています。しかし、その地域の風物や生活を丹念に記録した写真や映画は体系的に保存されることもなく、埋もれたままであったといえます。その意味でも、この美術館で展示されている一連の写真や記録映画はきわめて貴重な文化的な作品であり、資料です。

映画に関して言えば、さきほど述べたように、商業的に成功した映画などはかなりの程度保管されていますが、戦後、映画製作において大きな市場を占めていた記録映画は体系的な収集・保管が行われないまま今日に至っている、というのが現状です。そのため、フィルムの劣化が進み、いま保管しなければ、永遠にその映像にふれることができない状態になっている。たとえば、大手の建設会社や電力会社さらに地方の自治体が資金の提供者となり、戦後の近代化の過程で全国各地で行われたダム建設、トンネル工事、あるいは原子力発電所の建設などの様子を記録した、数多くの記録映画やPR映画が製作されたわけです。

こうした映画が、現在、制作会社に4万本、企画会社に1万本、自治体に2万本、現像所に5万本、個人に1万本、保存されていると言われていています。まあ、保存されていると言いましたが、正確に言えば「放置」されている。そこでようやく保存に向けた動きが生まれつつある。たとえば、東京大学や東京藝術大学が中心となり、記録映画保存センターや東京国立近代美術館フィルムセンターと連携・協力するかたちで、記録映画保アーカイブ・プロジェクトが始まっています。そこでは、戦後、3000本近い数の記録映画を製作した岩波映画の保存と作品の検証なども行われています。

こうした動きを後押ししてるのは、もちろんデジタル技術の進展です。劣化しつつあるフィルムをデジタル化して、再生することが比較的容易に行われるようになったからです。

20世紀はまさに「映像の世紀」でした。時代を記録し、さまざまな地域とそこに生きる人々の変化を記録してきた映像を、後世の人々に遺し、伝えていきたいものです。

テレビ番組アーカイブ

では、テレビ番組に関してはどうでしょうか。これも、諸外国と比較すれば、大きく立ち遅れていると言わざるをえません。

NHKは1980年代後半から本格的に番組の保存に努めてきました。また、それ以前のフィルムやテープの状態で保管されてきた番組を時代を遡って、遡及的にデジタル化する作業をおこない、今年ほぼそれが完了します。現在、NHKアーカイブスには、約64万7000本の番組、196万8000本のニュース項目、104万2000本の番組台本が保存されています。そして、これらの映像作品や資料がすべて研究者に公開される、というところまでできています。しかし、まだまだ一般の市民に公開されるというところまでには至っていない。インターネットを通じてNHKアーカイブスに保存された番組の一部や「見逃し番組」を無料で、あるいは有料で見ることができますが、その数は限られていますよね……。視聴できるのは約8000本くらいでしょうか。

また、民放では、こうした動きは見られません。ドラマや高視聴率のバラエティ番組はDVDといった形式でパッケージ化され、レンタルあるいは購入して繰り返し視聴可能ですが、ドキュメンタリー番組やニュース・報道番組は一回放送されてしまえば、個人が録画していないかぎり、見ることはできません。もちろん、自社で放送した番組は収録して保存しているはずですが、それがどのように整理されているか、私たちはまったく分からない。民放はいま経営的にも厳しい状況にありますから、こうした側面に予算を振る分ける余裕がないということもあるでしょう。

いずれにしても、放送資料の「法定納入」が義務づけられているフランスや、ブリティッシュ・フィルム・センターで番組の保存を行っているイギリスと比べて、日本のテレビ番組の収集・保存は遅れているということです。

記録映画そしてテレビ番組の保存はなぜ重要なのでしょうか。それは、一言でいえば、その時代を記録した重要な映像資料となるからです。文字や印刷物では伝えきれないリアルな事物を映像は伝えることができるからです。100年後あるいは200年後、さらに500年後の人々が、そうした映像を観るとき、何を想像し、何を考えることになるのでしょうか。そんなことを想像すると「わくわく」しますよね。

いま、国立国会図書館が民放やNHKのすべての番組を収録して保存する計画が国会で議論されていますが、私は、ニュースやドキュメンタリー番組に限らず、ドラマもバラエティ番組も含めて、そして地方の放送局が制作した番組も含めて、すべてのテレビ映像が保管されるべきだ、と主張しています。

それらはすべて、20世紀という時代がどんな時代だったかを映し出す「文化」だからです……。

20世紀はまさに「映像の世紀」でした。時代を記録し、さまざまな地域とそこに生きる人々の変化を記録してきた映像を、後世の人々に遺し、伝えていきたいものです。

2. 映像アーカイブをいかに生かすのか

～大学教育に映像アーカイブを活用する

ところで、アーカイブは映像を収集・保存する所ですが、収集・保存された映像をどう活用するか、どう活かしていくのか、これがもっとも重要なこととなります。ただ単に「保存」していても意味がありません。活用すること、公開して再利用すること、これが大事です。

ただ、重要であるとはいえ、利用する、公開して活用すること、これが実はもっともやっかいなことなのです。放送開始から長い期間、テレビ番組は「流れる (flow)」もので、一瞬で消えていくもの、と考えられていました。ですから、録画する、保存する、ということは想定されておらず、実際に初期のテレビでは技術的に保存することは難しかったと言えます。したがって、初期の番組はその多くが保存されていない。先に述べましたが、また保存する価値があるという意識も希薄だったでしょう。それが、録画機が普及しはじめた80年代に入り、本格的に保存するようになった。しかし、その時の保存の目的は、新たな番組を制作する際に自社の過去の映像の一部を挿入する、再利用する、というものでした。つまり、過去に制作された番組を放送以外で利用する、ということは想定されておらず、そのための著作権処理もなされていなかった、ということです。

いまインターネットを通じて再視聴できる番組は、その番組で使われた音楽の著作権、出演した人物からの許諾、すでに亡くなった場合はその遺族からの許諾等、こうした著作権処理をあらためておこなったものです。インターネットによる番組公開、これらはすべて関係者・関係機関からの許諾をえて、はじめて可能となる。そのためには、多額の費用を要します。著作権に掛る費用が、公開する場合の大きな壁になっている。ちなみに、美術館で収蔵している絵画などの作品も同様です。デジタル化して館内でスクリーンで映像として見せる場合には、関係者からの許諾が必要です。

このように映像アーカイブを活用するためには、いくつかのハードルを乗り越える必要があるわけですが、これからお話ししたいのは、映像を大学教育に活用した実験的なプロジェクトです。



▶ e-テキスト教材で大学教育を～実験的試み

これまでも、学校教育のなかで、映像を活用することは行われてきました。小学校では教育テレビの各学年の教科に合わせた番組を授業で見る、といったこともなされてきましたし、教師が自身で録画した映像を教材として活用するといったことも一般的に行われてきたと言えます。大学教育でも、教員が録画した番組の一部を使って、教育に活かすことを行ってきたわけです。しかし、それは、テープやDVDという媒体で、教室で番組なり映像を学生に見せる、というかたちをとらざるをえなかった。

早稲田大学で2012年に行った実験的プロジェクトは、そうした方法を刷新して、学生が、いつでも、どこでも、自身のパソコンがあれば、教員が選定した番組を見ることができるよう教材=e-テキスト教材を開発したところに新しさがあります。

具体的にお話ししましょう。

このプロジェクトは、NHK放送文化研究所の全面的な協力のもとで行われました。研究所の「高等教育に番組を活かす方法」にかんする調査研究の一環として行われたということです。

一方で、これを活用した早稲田大学、具体的には私の担当科目である教育学部開講科目「広報関係論Ⅱ」では、後期のテーマを「沖縄現代史」として設定し、戦後の沖縄を記録したNHKのドキュメンタリー番組を活用して15回の講義を設計しました。

放送文化研究所は、このプロジェクトのために新規にサーバーを立ち上げました。研究所の研究員と、この講座をリレー方式で担当した複数の教員が協議して、沖縄関連の番組を選定しました。そのうえで、NHK側が著作権処理を行い、学生が自身のパソコンでパスワードとアカウントを入力すれば、サーバーに格納された番組を、いつでも、どこでも、視聴できるe-テキストシステムを構成したわけです。使用した番組は、沖縄関連の膨大な番組の中から、学生にぜひ見せたい優れ

た31本の作品です。

著作権処理は前述したように大変な作業となります。今回は担当者がわざわざ沖縄まで出向いて、番組に関連する方々から許諾を得る作業をしていただきました。

e-テキストシステムの優れた点

このシステムの優れている点は、学生が事前視聴、事後視聴ができることです。繰り返し視聴できる。これが学生にとってはかなりハードルが高い。2本の番組を見るとして、最低でも2時間、しっかり見る。1回視聴しただけではよくわからない、そうすると2回、3回、と見る必要がある。

通常テレビを見るという経験は、リビングで家族で見る、自分の部屋で一人で見るといった経験です。番組はあくまで「流れて(follow)」いくものですから、注視して見るということはない。番組がどう構成されているか、どのような工夫がなされているか、ほとんど気にしないで見るわけです。

こうした日常のテレビ番組とのかかわりを見つめ直し、しっかり思考する対象として番組を位置づけるために、このプロジェクトでは、2つの課題を設定しました。第1は、もちろん、映像を通じて沖縄現代史を学ぶ、ということです。戦後の沖縄の歴史を学ぶということです。それと共に、第2は、戦後の沖縄をカメラはどう記録したか。映像を、つき離して、対象化しながら観ること、カメラが捉え、編集された映像のフレームがもつ歴史的な意味、言い換えれば映像の歴史性を考えることでした。

そのことを私は、報告書で、「記録された〈現実〉」から学ぶ、そして「記録するという〈現実〉」から学ぶ、と記述しました。なかなか難しいことですが、この二つの側面を同時に学んでほしかったわけです。つまり、事前に何度も番組を注視し、講義で映像の構成や演出の方法を学ぶ、そのことを通じて、「テレビの見方が変わる」、「テレビの見方を変える」、その経験を学生に求めたわけです。学生にとっては、かなり ▶

e-テキストシステム

『NHKアーカイブスで学ぶ沖縄現代史』報告者、NHK放送文化研究所、2013年、非売品
なお、本報告書は「部内報告書」であり公開されたものではありません。

NHK放送文化研究所 2013年春の研究発表とシンポジウム

学生用トップページ

件数: 15 件

No.	実施日	番組	担当講師	視聴番組	視聴
1	2012年 10月03日	アーカイブス活用	伊藤 亨	●事前視聴番組 ETV特集「テレビが見つけた沖縄 〜アーカイブ映像からたどる本土復帰40年」(2012年、49分)	
2	2012年 10月10日	沖縄現代史特撮	田中 康博	●事前視聴番組 長谷の風車 山田勝心と150人の一族 (1984年、45分) ◎参考番組 ・日本の道場「加納の島・沖縄」(1959年、41分) ・ドキュメンタリー「永平園からの返書〜沖縄・久留アジ」(1973年、29分)	
3	2012年 10月17日	沖縄戦の記憶(1) 「琉球春秋」〜本土からの語り	七尾 実	●事前視聴番組 特集ドキュメンタリー「沖縄の戦車」(1969年、60分) ◎参考番組 ・NHKBS1放送「沖縄」(1956年、20分)	

クリックすると
視聴画面へ

視聴画面

視聴番組の
サマリー

クリックすると
大画面に

学生が事前視
感想を入力す

1

学生用トップページ

No.	実施日	表題	担当講師	掲載書籍	掲載
1	2012年 10月13日	アーカイブズ活用	伊藤 亨	●事前研究書 E.T.W.野矢「アトピーが見つめた沖縄 ―アーカイブ推進からたどる本土復帰40年」（2012年、89頁）	
2	2012年 10月10日	沖縄現代史総論	田中 康雄	●事前研究書 長谷の風華 山岡清二と150人の一族（1984年、45巻） ☆参考書 ・日米の通商「琉球の沖・沖縄」（1959年、41巻） ・ドキュメンタリー『本学館からの足跡―沖縄・先府ア3』（1973年、29巻）	
3	2012年 10月17日	沖縄戦の記憶（1） 「残虐地獄」～本土からの語り	七沢 実	●事前研究書 戦後ドキュメンタリー『沖縄の戦争』（1969年、60巻） ☆参考書 ・加納武蔵『戦後』（1956年、20巻）	

クリックすると
視聴画面へ

視聽畫面

視聴番組の
サマリー

クリックすると
大画面に

学生が事前視聴の感想を入力する

NHK放送文化研究所 2013年春の研究発表とシンポジウム

講師用プレイリスト（授業で使用する部分を簡単に切り出せる）

主しながら
スタート)
をセット

Out(終了)
点をセット

in ~ Out間を
プレビューする

講師は学生の事前感想を
授業前に閲覧できる

→

学生感想一覧

【配信講座】 日曜：2013年10月17日 演題：沖縄戦の記憶（Ⅱ） 【所属機関】 ～東大からの語り

件数：49 件

学生ID	氏名	感想文
		沖縄戦で、島内を亡くしたつらさを表現にあらわしている沖縄人。しかし、戦後、経済的に考え、アメリカの支配下である沖縄で暮らすしていくには、沖縄によりそう生活になる。それは、基地周辺の生活環境で働くことや、米商売の発展などである。沖縄人は苦痛した気持ちを「地方ないい」という言葉に表れてやり過ごしている。それに反して、本土の日本の暮らしはないのである。戦争中、戦後、復帰後の今も犠牲者は沖縄で生きつづけるのかと思った。そして、その痛みを思い出すかのように、沖縄の自然や文化を賛美し、観光地化した気がする。本土に暮らしているもの、沖縄の痛みを知ろうとしていなかったが。
		当時の沖縄人が戦争前夜の間に抱いたアメリカと共存することによって意識をすることができている点。一方、戦時の他と異なり、また戦後期的によって、本土と切り離されたことについて、軍に本土の権限になりてきたその立場から本土との関係に戸惑いながら生きていくことが感じられた。権限になった人たちは戦時中こそ戦時すれば国策に見られる。国家されるなどの意味で死んでいったのではなく、心までなく地方へ見られていったことが感じられた人の話。戦前からうかがえた。自分にとっての未来に意図的であった戦時中の経験が国家化された時でも、沖縄が本土復帰した際でも、

講師用プレイリスト（授業で使用する部分を簡単に切り出せる）

再生しながら
in(スタート)
点をセット

Out (終了)
点をセット

in ~ Out 間を
プレビューする

講師は学生の事前感想を
授業前に閲覧できる

【参考文献】①《明》：2012年11月12日 来源：中国经济网（3） ②《海国图志》：上海书店出版社

[illegible]

▶ しんどい作業だったと思います。

第2の優れた点は、教員が事前に映像を編集することができるという点です。そのために、講義中に必要な箇所だけを学生に見せて、映像視聴と解説を同時に行うことができる。これまでであれば、番組の全体を学生に見せるか、講義中に必要な箇所を探して映像を見せるか、どちらかの作業を行う必要があったわけですが、すでに学生が事前に映像を見ていることが前提なので、それが無くなり、スムーズに、効率的に、映像視聴の時間と解説の時間をコントロールできるということです。

実際にこのシステムを活用した効果はどうだったか。学生のアンケートから、彼らの声をいくつか拾っておきましょう。

e-テキストシステムを使った教育上の効果

まず、沖縄現代史についての理解が高まったかどうか、に関してです。

- ・ 圧倒的に沖縄に関する知識が増えた
- ・ 文字上の沖縄ではなく、人としての沖縄の歴史を知った
- ・ 沖縄のことを「自分とは関係のない場所」と思ってきたが、そうではなくなった
- ・ 自分が生まれる前の沖縄の様子を映像で知ることができて印象が変わった

こうした意見から理解できるように、沖縄戦や占領下の沖縄の事実について「初めて知った」「衝撃を受けた」という記述が多く、番組映像がもつ強い喚起力、影響力がうかがわれると思います。

また、映像を使った講義についての意見です。

- ・ 正直ドキュメンタリーの類は苦手なジャンルだった。まさに現代人の「思考停止」になっていたので、この授業によって「考える」時間が増えた
- ・ テレビ番組といえば娯楽であった。しかしこの授業でドキュメンタリーは学術的な資料になるという認識が変わった
- ・ 複数のドキュメンタリー番組を一つのテーマで見ると新たな見地をえられる

- ・ ドキュメンタリーは、見せ方、見方で、こんなにも印象が異なることに驚いた

学生の発言を見ると、数ヶ月間、半ば半強制的に番組を読み解く経験をしたことで、「考える材料になった」「学術的資料になる」といった、これまで期待していなかった番組の機能を認識していることが分かるでしょう。また、カメラの位置や映像の編集や構成で、「見え方」を操作できることなど、これまでの視聴では気づかなかった側面に面白みや関心を感じられるようになったことも、彼らの記述から理解できます。

3. 小中高の教育に活かし、地域で映像アーカイブを育てる

以上の取り組みは、高等教育、大学の教育に映像資料を活

かしていくための実験的な試みでした。初年度の2012年は、いまお話しした早稲田大学における「沖縄現代史講義」、2013年度は記録した映像を用いた法政大学の「水俣病講義」、そして2014年には東京大学で「東京イメージ講座」が開講しています。

さて、映像アーカイブを教育に活かす試みは、大学だけでなく、小中学校や高校、そして

地域でも行えるでしょう。それぞれの教育段階に応じて、生徒が日々生きる地域社会の歴史や風土を映像で学ぶことは、地域への愛着や地域アイデンティティの形成に役立つだけでなく、いま生きている世界の現実を相対化し、未来を想像する力になるかもしれません。

また、地域を基盤にした映像アーカイブが美術館や博物館や大学の連携の下に各地に設立され、さらにそうした複数のアーカイブ機関がネットワーク化され、映像の交換がなされるならば、自分たちの地域を特別視したり、特権化するのではなく、それぞれの地域が他の地域との相互交流から成り立ってきたこと、そしてその交流こそが地域の特徴を織りなしてきたことがよりよく理解されるのではないのでしょうか。

そうした希望を抱きながら、映像アーカイブの可能性を考えていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。 ■

新潟大学地域映像アーカイブデータベースと 新潟県立図書館の新聞データベースとの統合に向けて

原田健一（新潟大学）

1. 統合型データベースの構築、 その社会的背景

今回、新潟県立図書館の新聞データベースと新潟大学地域映像アーカイブのデータベースの統合に向け、一步を踏み出すことになりました。マス・コミュニケーションである新聞記事のデジタル化したコレクションと、社会の中間的なコミュニケーションというべき「地域」コミュニティに関連する映像を発掘・デジタル化したコレクションとを統合します。ゆくゆくはこれら地域メディアの情報（コンテンツ）を集合化し、横断的に検索し、研究するなど、さまざまな利活用に応えようとするものです。

既に、新聞社が行うデータベースや、放送局、あるいは資料館、アーカイブなどが単独で行うデータベースは数多く存在しています。しかし、現在、こうしたさまざまな資料、デジタルデータを横断的に結びつけることは行われていないだけでなく、そうした新しい創意に満ちた研究も行われていません。

もちろん、こうしたデータの統合は、研究的な課題に応えるだけではない社会的意味を有しています。こうした社会の情報コンテンツを文化資源として共有化するためには、異なる領域の機関である博物館、資料館、図書館、大学、産業界と提携すること、これをMALU連携といますが、そうした大きな社会的な枠組み、システムを創出する、既存の社会システムの再構築という大きな社会的動向と関わっています。統合型データベースの構築は、単なる研究という枠では収まらない、大きな社会の流れなかにあり、自らもそうした動向に関わろうとするものです。

現在までに、新潟県立図書館では、戦前期の地域新聞のデジタル化が終わり、データベースを構築する段階にきています。さらに、新潟大学地域映像アーカイブの映像データベースは準備段階を終え、本格的な運用体制へと移行しつつあります。今回の取り組みは、この二つのデータベースを検索できる、統合型データベースを構築するために、新しい検索システムの作成を、イパレットとグローバルネットコアが開発し行うものです。

この三者の連携によって開発されたシステムが運用できるようになった場合、今後、県内の他の関連機関のデータの統合が大きく進むことになるでしょう。さらには、研究利用が主となっていたデータベースはさらに汎用性を高め、小中高校などの学校教育に映像などさまざまなデジタル情報を提供することを通して、社会・文化全体をボトムアップする基盤を創出することが期待されます。

2. 統合型データベース構築によって 明らかになる新たな研究的な意味

既に述べたように今回の統合型データベースは、異なったジャンルのデータ群とデータ群とを統合することで、既に社会に実在するが不可視のものとして存在していた資料空間を現出させるものです。こうした新たな膨大な資料空間、群としての資料を分析する新たな研究方法の開拓という大きな転換を促進するものです。

こうした資料・映像のもつ社会的な関係性、場のコンテキストを明確にするには、必ずしも、その内容にこだわらない、横断的な関係性のあり方を探り出す必要があります。歴史資料、民俗資料、芸術資料など個々の研究領域の枠組みの内で見えていたのでは分からない関連性、社会的な文脈を読み解くためにデータ群とデータ群とを関連づけ、媒介することで、社会で生み出されている不可視の構造的性、社会的意識、感情、感覚の共通性をえぐり出すことが可能になるのです。

その意味で統合型データベースは、今まで目の前の日常生活の中で生起していたにも関わらず、実体化できなかった現実を新たな研究概念、パラダイムによって捉え直すことを可能にするものとなります。

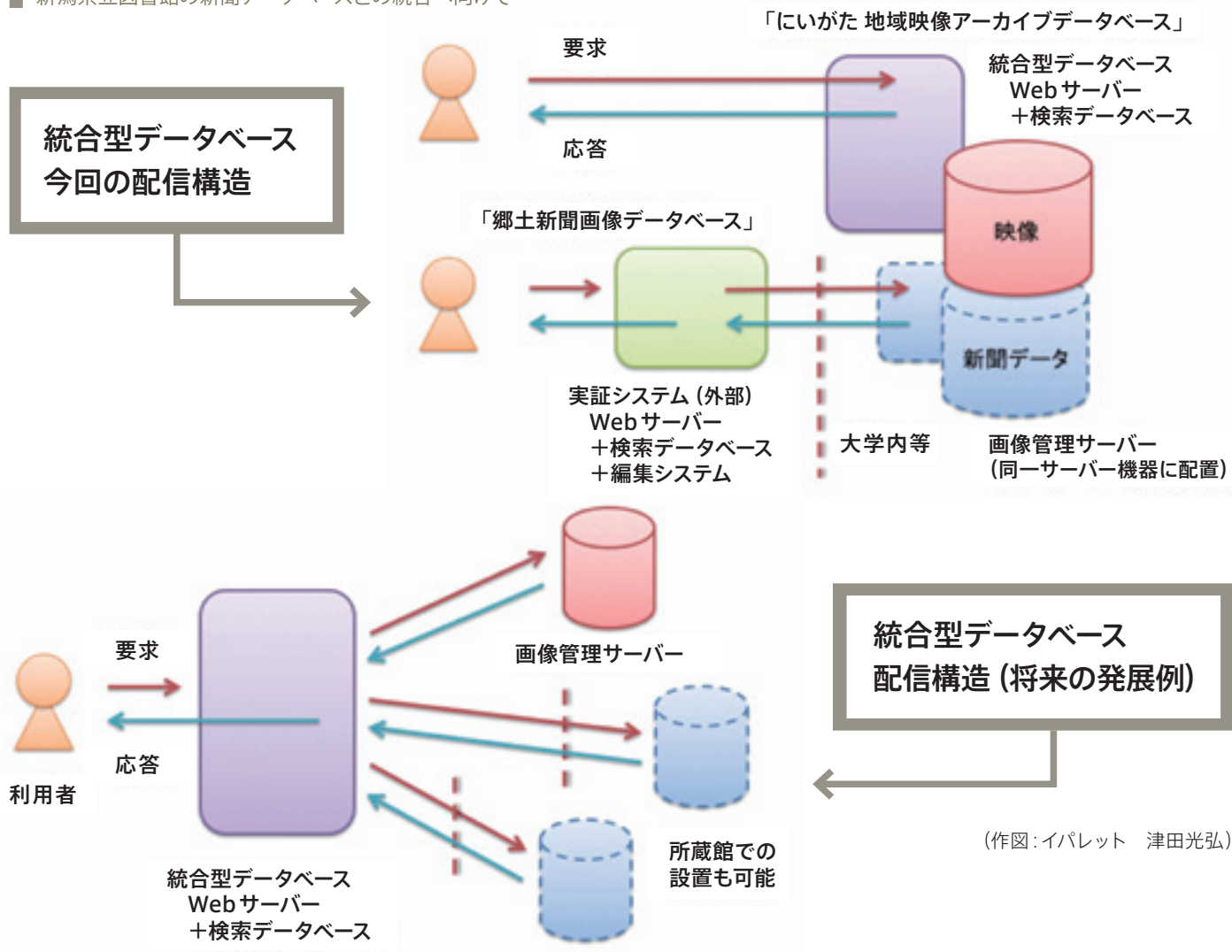
3. 統合型データベースを構築するための 新たな技術の開発

異なったジャンルのデータ群とデータ群とは、そのまま異なった機関と機関のデータであり、機関と機関との連携による統合を意味します。

統合のための構成は、公開用の表示・検索等を担うウェブサーバーと、外部から直接アクセスできない画像管理サーバーに分離することによって、資料公開方法の柔軟性と一部公開制限のある画像データの保安について両立を図ります。具体的には、マルチフォーマット対応の画像ビューアとIIIF（International Image Interoperability Framework）等の国際的規約、新技術による、運用者側と利用者側の双方に利便性の高い新世代型統合システムを目指しています。

この方式の利点は、画像サーバーをWebサーバーから分離するため、インターネットから画像への直接的なアクセスを制御でき、さらに画像管理サーバーにより、多様な画像フォーマットを用いることができるのです。

第一段階として、新しいシステムであり、システムとして機能するか、実証するための作業を今年度行います。第二段階とし



- ▶ て、今後、将来的な発展した統合型データベースの構築を行うこととなります。

4. 連携機関、ならびにそのデータの状況

新潟大学地域映像アーカイブデータベース

<http://arc.human.niigata-u.ac.jp/db/>

は、現在、映像や音源などを着々とデジタル化しアーカイビングし蓄積しています。2015年10月段階で、写真約2万7,000点と動画約300本を新潟大学内で公開していますが、将来的には、総計で写真約10万点、動画約1,000本、音源約1,000点の公開を予定しています。

新潟県立図書館では所蔵する新潟県関係新聞マイクロフィルム（明治～昭和17年10月）約22万7,500コマのデジタル化を終え、貴重な新聞の保存媒体の多様化を図ると共に、データベースを構築しインターネットを通じて、地域における他の登録図書館での閲覧を可能とし、資料の有効活用を図ることを予定しています。

地域映像アーカイブと新潟県立図書館の連携による統合型データベースのシステムの構築を2016年6月に終え、その閲覧公開は、9月頃を予定しています。それに合わせ、今後の地

域の関連機関のデータの統合を促進するための公開シンポジウムなども行う予定です。

さらに、教育における地域コミュニティの機能が弱くなっていることを受け、MALUI連携による統合型データベースを基盤として、弱くなったコミュニティと学校や社会教育施設との間を、情報・映像などを媒介とすることで再構築することをめざします。活力ある地域コミュニティの形成の中核に、学校や図書館などの社会教育施設を再度、位置づけ直し、また、中高年層のボランティア・チームを立ち上げ、地域に蓄積されている無形の知識や知恵を発掘し、伝達・継承し、蓄積することが求められています。 ■



新潟県立図書館でデジタル化した新聞

「にいがた 地域映像アーカイブ」データベースの試験的公開のお知らせ

新潟大学人文社会・教育科学系附置地域映像アーカイブセンターでは、新潟地域の生活のなかにある映像を発掘し、整理・保存を行い、デジタル化をするだけでなく、その内容を整理、分析し、映像メディアの社会的あり方を考え直し、新たな社会の文化遺産として映像を甦らせるべく作業を行ってきました。

デジタル化が終わっている映像や音源は、着々とアーカイビングされており、2013年4月現在、写真約2万7,000点と動画約300本を新潟大学内で公開しています。5年後には、



「にいがた地域映像アーカイブ」データベース
<http://arc.human.niigata-u.ac.jp/db/>

総計で写真約15万点、動画約1,000本、音源約1,000点の公開を予定しています。

2016年9月(予定)より新しい検索システムと共に、写真、動画、さらには絵葉書、音源などの新しいデータをアップする予定です。さらに、新潟県立図書館の新聞データベースとも統合し、検索・閲覧できるようになります。

今後も、博物館、資料館、美術館、図書館、小中学校などで利用できるよう、県市町村とも連携し、閲覧・公開を推進してまいります。

(なお、現在、学外からの一般の方が閲覧する場合は、IDとパスワードが必要となります。)

この公開は、「研究・教育普及目的」の利用ということで、著作権者、あるいは所蔵者の了承を得て、公開を行っております。研究者や学生だけでなく、一般の方にも、是非とも、これらの映像を利用いただき、どんな風に使ったらよいのか、一緒に考えてみたいと思っています。

是非とも、こうした映像の利用のしかた、さらには、こうした映像公開の規準についての、建設的なご意見をいただきたくお願い致します。

新潟大学 人文社会・教育科学系附置
地域映像アーカイブセンター
原田健一

にいがた 地域映像アーカイブ 第6号

2016年3月発行
ISSN 1883-5643

「にいがた地域映像アーカイブ」データベース
<http://arc.human.niigata-u.ac.jp/db/>

表紙・裏表紙写真 中俣正義

(表紙: NM-P-002-068-03、裏表紙: NM-P-002-068-01)

編集 地域映像アーカイブセンター

発行 新潟大学人文学部

問い合わせ先 〒950-2181
新潟県新潟市西区五十嵐2の町8050番地
新潟大学人文学部内

URL <http://www.human.niigata-u.ac.jp/ciap/>

E-mail cria@human.niigata-u.ac.jp

デザイン パルスデザイン

印刷 イロドリ

※ バックナンバー、新刊情報については地域映像アーカイブのウェブサイトをご覧ください。

※ 各画像に付した記号番号は地域映像アーカイブの資料番号です。

『北越雪譜』から民俗写真へ

石井正己（東京学芸大学）

湊町・新潟の原風景 ―芸妓から見た「にいがた」

原田健一（新潟大学）

勝之助兄にゃと写真

船城俊太郎

アーカイブを活用した映像研究と教育の可能性

伊藤 守（早稲田大学）

新潟大学地域映像アーカイブデータベースと 新潟県立図書館の新聞データベースとの統合へ向けて

原田健一（新潟大学）

